

八代将軍徳川吉宗と薩摩芋試作奨励

～享保の改革で運に恵まれた青木昆陽～

川越いも友の会 事務局長

やまだ えいじ
山田 英次

1. 近世甘藷文化研究の推進の必要性

サツマイモの明治期以降からの歴史文化研究については、元いも類振興会理事長の狩谷昭男著『サツマイモの近代現代史』2012年発行があるが、それ以前の江戸時代の近世甘藷文化研究は、あまり進んでいないように思える。研究者としては、過去に宮本常一氏、筑波常治氏、井上浩氏、山田尚二氏などが、それぞれの書籍を著している。現在では、伊波勝雄氏（沖縄県）や西村和正氏（熊本県）が研究活動をされている。近年新たな成果による見解も出されつつあることから、近世甘藷文化研究の推進が望まれる。その際に近世甘藷文化研究の区分は、次のように時期的に分類されるべきと考える。

I期：甘藷導入期《琉球に導入から主に九州や西日本各地へ伝播》1605年～1715年

※慶長期より正徳期まで。

II期：甘藷転換期《幕府の「享保の改革」により関東各地へ普及》1716年～1763年

※享保期より宝暦期まで。

III期：甘藷商業期《ふかし芋や焼き芋の商品作物として江戸などで需要拡大》

1764年～1867年 ※明和期より慶応期まで。

今回は、II期の「幕府の享保の改革」に焦点を当てて、幕府の動きを通して青木昆

陽の薩摩芋の業績について再検討をしたい。

2. 問題点の具体的な提起

今までは、青木昆陽が「享保の大飢饉（1732年）を契機に、飢饉対策には救荒作物として薩摩芋が有効である」と幕府に進言（蕃藷考を上申）し、実際に享保20年（1735）に小石川養生所で試作に成功して薩摩芋の普及が広がったように論じられることが多い。後年、甘藷先生として賞賛される所以であるが、その功績に疑問を唱える研究者が過去に何人かいる。

実際に、昆陽の試作以前に関東の幕府直轄地等で薩摩芋の試作を行っており、失敗もあったが成功した者もいた。さらに昆陽の栽培法では関東に適さなかったとの指摘もある。

よって、昆陽の功績を過大評価する立場ではなく、各種の文献類に記述された幕府側の動きから享保期の薩摩芋試作奨励について、考察したい。要点は、①享保の改革の中での幕府主導による薩摩芋試作奨励の動きとは？ ②なぜ、昆陽は甘藷先生として後世に名を残すこととなったのか？ の2点である。

3. 徳川吉宗による「享保の改革」とは

青木昆陽が出世した時代の将軍は吉宗である。徳川吉宗（1684～1751年）は、江戸幕府八代将軍で、一般に「江戸幕府中興の祖」「米将軍」とも称される。紀州藩二代藩主の四男として誕生、22歳で紀州藩主となった時、質素儉約をもとに借金に苦しむ藩の財政再建改革を行い成功させた。33歳で幕府の八代将軍に就任後、強力なリーダーシップを発揮して、江戸三大改革のひとつ「享保の改革（1716～1745年）」と言われる「国家と社会の大規模な幕政改革」に取り組んだ。吉宗が将軍に就任した時には、社会は低成長期にあり、政治の停滞、財政悪化、災害・疾病の発生など厳しい局面を迎えていた。そのため享保期に幕政改革を断行し、先例や格式にとらわれない政策を行った。

享保の改革は、主に「深刻化した幕府財政の再建」と「安定した幕府運営」が目的であったが、内容は多岐に渡る。財政再建、都市政策、司法制度の整備、全国規模での行政の展開と殖産興業や商業対策、更に能力主義に基づく人材登用と組織改革に至るまで、広範囲な分野に渡って実施した。



八代将軍徳川吉宗肖像画
(ウキペディアより)

具体的には、享保3年（1718）町火消設置令、享保5年（1720）江戸大火の対策「江戸火消しいろは四十八組」設置と「キリスト教に関係ない漢訳洋書輸入」解禁、享保6年（1721）目安箱の設置、享保7年（1722）小石川養生所の設置、定免法を導入（過去数年の平均収量を基準に年貢を定額にする計算方法）、新田開発奨励の高札を日本橋に掲示、享保9年（1724）儉約令の施行（衣服の売買を制限）、享保12年（1727）公事方御定書制定の開始（江戸幕府運営の基本的な法律を文書としてまとめる：完成は1742年）、享保13年（1728）五公五民制を導入（米の収穫の50%を領主〈公〉が取り、50%を農民〈民〉のものとする年貢の取り立て。それ以前は四公六民制で、農民の生活は更に苦しくなった）などが特に知られている。吉宗の積極的な施策で幕府財政は黒字化した、一方で農民への負担が大きく増えた改革であった。

改革のなかのひとつである殖産興業としては、主に関東地方に新しい商品作物や救荒作物の栽培導入が積極的に図られた。薬種人参（朝鮮人参）、サトウキビ（砂糖）、菜種、唐胡麻、薏苡（よくい：ハトムギ）、榲（はぜ：木蠟）、薩摩芋などのさまざまな作物の栽培が奨励された。そのなかで、西日本を中心にして起こった享保の大飢饉（1732年）の発生により、特に注目されたのが薩摩芋の普及栽培であった。

4. 吉宗の薩摩芋に関する認識

吉宗が、薩摩芋について、どの程度の認識を持っていたかを知る史料としては、別添参考資料（50頁参照）：『徳川実紀』（有徳院殿御実紀附録卷十七～甘藷栽培～）を

読むと具体的に知ることができる。有徳院とは、吉宗のおくり名である。その記事の内容の要約は、次の通りである。

「側近の儒学者の深見新兵衛有隣（1691～1773）に、享保の大飢饉のとき、長崎あたりはどのような状況だったのかを尋ね、新兵衛は、享保6年（1721）には長崎の農民がすでに甘藷を植え、食用としていたため、この度の凶荒（大飢饉）には多くの助けとなっていたと答えた。さらに薩摩では、以前より、甘藷は農民の日用食となり、五穀も出来ない塩を含んだ不毛の地でも多く作り、味噌や葛などにも加工利用しているとしている。また、薩摩の地へ行き交う舟人は、甘藷を買い求め、江戸に運んで売り買いをしているとしている。しかし、江戸で、何時しか痰（たん）の毒という風評のため売る者がいなくなってしまう。でも、それは見当違いで、益多い作物である。その栽培法も書いて（幕府へ？）奉っている。その後、青木文蔵（昆陽）が甘藷考（蕃藷考:1733年）を書いて進めたこともあり、深見新兵衛の推挙により、江戸へ来ていた長崎の鐵工の平野良右衛門が栽培に詳しいので、文蔵と良右衛門と一緒に、江戸城内の吹上御庭にて作らせたとある（1734年）。さらに繁殖して、近国の代官に言って、温暖の地を選んで植えることを進め、ほどなく上総下総の地では、甘藷を多く作って、江戸に常に持って来たりして、後に日用の食となった。これは、（吉宗）の御仁慈の御心で、天意が叶わせたものである。」

この史料で注目すべき点は、昆陽が小石川養生所及び同薬園で、享保20年（1735）に薩摩芋の試作に成功したこと、さらに昆陽の蕃藷考を一般庶民にも読めるよう仮名混じり文でやさしく書き改めさせて、享保19年（1734）12月『薩摩芋功能書并ニ作り様の傳』を刊行したことが記事として記載

されていないことである。小石川養生所の試作の件と功能書の刊行の、この2点については、吉宗自らの直命ではなかったことになるのではないか、と考えられる。

5. 大岡越前守忠相と薩摩芋試作奨励

吉宗の享保の改革を実際に町奉行として支え、進めた人物として大岡越前守忠相（おおおかえちぜんのかみただすけ：1677～1752年）がいる。



甘藷先生青木昆陽肖像画
（複写絵：サツマイモまんが資料館所蔵）



小石川植物園（旧小石川薬園）内の甘藷試作跡碑
（大正9年建立：東京都文京区白山）

大岡越前守は、享保の改革の全時期を通じて、吉宗を支え続け信頼が厚かったとされる。大岡越前守忠相は、享保2年(1717)、41歳の時、江戸の南町奉行に就任した。すぐに江戸の町の防火体制再編のため、町火消組合(享保3年)を設置し、江戸火消いろは四十八組(享保5年)を再編成し、防火建築をも奨励して防火体制を強化した。さらに、貧民救済のため無料の医療施設「小石川養生所」の設置(享保7年)にも尽力した。また、大岡には、もうひとつ重要な職務があった。享保7年(1722)に町奉行の中山時春とともに関東地方御用掛の兼任を命じられた。これは関東周辺の農政を担当し、武蔵野新田開発や治水・普請などを行い、農村を強化する役職だった。その農政のひとつとして、殖産興業のため商品作物や救荒作物の試作奨励も行われた。中山時春が享保8年に離職すると、大岡ひとりで務めることとなった。大岡の下には、その業務を遂行するため、様々な有能な役人が登用された。また、勘定所の支配下にあった関東郡代(代官頭)及び代官も、大岡の地方御用掛の直属となった。

関東地方の各代官を通して、幕府直轄地等で行われた薩摩芋の試作奨励(種芋配布)について、次のようないくつかの記録が残っている。

A) 享保7年(1722)7月・・試作失敗

・埼玉県史料集第四集『会花落穂集』より
「薩摩芋植付に付き一札

差上申一札之事

薩摩芋貳拾植候内貳ツ先達而御訴申上候通生へ、め壺尺ほど罷成段々つる切植付申候、残之義、此間之長雨ニて腐申候哉、め生へ不申候、仍之御訴申上候、

以上

大門町 年寄 源右衛門
寅七月二日 』

※大門宿(現さいたま市緑区大門)の会田家に残された古文書『会花落穂集』の享保7年7月の記録である。代官所より配られた種芋20個を植えたところ、発芽したのは二つだけで、あとは全部、腐ってしまったとあり、失敗に終わった趣旨が報告されている。

B) 享保15年(1730)5月・・奨励失敗

・『飯能市史資料編10(産業)』に「資料4 薩摩芋試作の件(口上書)」(原文略)が掲載されている。その要約は、関東代官頭の伊奈半左衛門様より薩摩芋を作るよう命じられたが、小瀬戸と小岩井両村の名主が連名で、「近村で薩摩芋を作っているのをみると、土地不相応で枝葉ばかりで実がならず、空地も無く他の作物のさわりになるので作ることはできません」と、享保15年5月にていよく断っている。農民達も薩摩芋の栽培法がわからないし、植えても収穫がないのに税がかかるのをたぶん恐れたのでは、とされる。

C) 享保18年(1733)4月・・試作成功

・群馬県『太田市史 史料編近世2』及び『太田市 通史編(近世)』には「享保十九年二月 只上村(ただかりむら)定四郎薩摩芋作覚外一件書付」(原文略)として、享保18年4月付け幕府代官の後藤庄左衛門様あてに只上村の名主・板橋定四郎(1695~1738)が薩摩芋の試作について研究状況を詳しく報告したことが掲載されている。それによると、幕府より薩摩芋の種芋を前後20個受け取り、3月7日(旧暦)に植付け、それを5月中旬、

一尺ほどに伸びたツルを少しずつ切って伏せ込み、ツル数600株になったところで、少し掘ったところ大きい芋は太さ5～6寸廻り（15～18cm）になったという。さらに良い地所や肥やしの効いた所は葉が繁茂して芋は太らず、肥やし不足の所ほど出来が良いとしている。総じて土性の悪い畑ほど芋の出来がよいとしている。定四郎は、相当の教養と心得があった人物とされ、和算にも長じていたとされる。役所へ提出した報告書は、その写しが翌19年9月に笠岡役所（岡山県笠岡市）で作成され、管下の名主に渡されて現存されていたものである。

なお、定四郎の試作成功後、只上村を中心に、村々に薩摩芋栽培が普及したのか否かの記録は残っていない。

- D) 享保20年（1735）11月・・試作失敗
- ・『津久井郡勢誌 復刻増補版』には、相模国津久井県若柳村（神奈川県津久井郡）での享保20年11月付け「甘藷の試作報告書」（原文略）が掲載されている。その内容は「薩摩芋の種芋六ツを植えたが、三ツはくさり、三ツは生えて新芋五個ができたけれど、いずれも親芋より小さい」と、役所の代官・蓑笠之助様あて、若柳村等の名主が報告している。栽培法が未だ徹底されていなかったことが推測される。
- E) 享保18年（1733）2月・・種芋調達
- ・長崎県大村市『新編大村市史 第3巻（近世編）』第二章第二節「享保の改革と飢饉」及び（地方研究20）藤野保『甘藷の関東伝播に関する一資料』によると、大村藩が大岡越前守へ種芋を調達したことが記載されている。具体的な史料『見聞集』

59巻と『大村家覚書』11巻のなかに、町奉行大岡越前守宅へ「甘藷差出之事」（原文略）として、その状況が説明されている。要約すると、享保18年正月七日に、江戸町奉行大岡越前守忠相の用人に大村藩の役人が呼び出され、八り半芋（甘藷）を国元から取り寄せることが出来るか聞き、その後、更なる要請の結果、大村藩（七代藩主・純富：すみひさ）は、2月5日に国元から300斤（180kg）の甘藷の種芋を8箱に詰め、従士1人、卒1人を付けて江戸へ送り、2月29日に大岡越前守宅に差し出した、とある。その後、江戸で作るなり、と記されている。このように大岡越前守により、試作のための種芋が手配されていたと考えられる。

以上のようないくつかの記録から、享保期になってより、関東地方へは地方御用掛の大岡越前守の下、各代官を通じて、幕府直轄等の各村々へ薩摩芋の種芋が配られ、試作奨励が進められていたことが推定される。さらに、試作奨励にとって大きな問題は栽培法が不明なことであった。

享保の大飢饉（享保17年）の状況（薩摩芋を栽培していた地域は餓死者がほとんどでなかったこと）を知った幕府（吉宗）は、飢饉対策には薩摩芋の普及がなにより有効であると考え、関東でも普及の重要性が増していたと考えられる。

注）享保20年時点での国内の薩摩芋の普及状況・・本草学者・丹羽正伯編集による「諸国産物帳」より知ることができる。享保19年3月に、幕府の老中・松平乗邑より全国の大名等に通達が出され、諸国の産物に関して丹羽正伯より照会があったら回答するよう指示され、日本各地の農産物・動物・

植物・鉱物などが調べ上げられた。享保20年に編集されたその中に甘藷もあり、西日本ではある程度普及が進んでいた。そして「東日本では、すでに佐渡島・越中国（砺波郡）・能登国（羽咋郡／鹿島郡）・加賀国（能美郡）・伊豆国で、琉球いも・薩摩芋が作られていた」ことが記されている。尾張国・美濃国・遠江国（東海地方）では、まだ甘藷が普及していなかったが、関東地方近隣の伊豆国では作られていたことを知ることができる。（参考文献：安田健著『江戸諸国産物帳～丹羽正伯の人と仕事～』より）

6. 与力・加藤枝直による青木昆陽の推挙

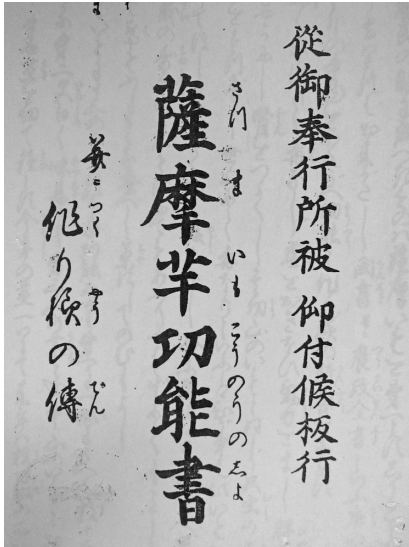
青木昆陽の出世を語るにあたって、重要な人物がいる。それは、大岡越前守の配下の与力・加藤枝直（えなお：1693～1785、通称は又左衛門）である。枝直は、伊勢国松坂に生まれ、享保3年（1718）に江戸へ出て幕府に仕え、享保5年（1720）には大岡越前守忠相配下の町奉行所与力となり、翌年には吟味方に昇進し、300坪の邸宅に10人の奉公人を抱える身分になったとされる。枝直は、国学者で歌人の賀茂真淵（かものまぶち）に師事し、和歌にも堪能で教養高い人物であったという。

加藤枝直は、享保18年（1733）2月に青木昆陽を大岡越前守に推挙（書状にて上申）した人物として知られ、推挙の経緯と共に昆陽の小石川養生所での薩摩芋試作の具体的な状況を『蕃薯起立』（「近世地方経済史料 第三卷（吉川弘文館発行）」）として書き残している。昆陽自身は、出世のきっかけや試作の状況を書き残していないため、枝直の『蕃薯起立』が基本史料となる。まず、それによると、枝直のかつての所有地

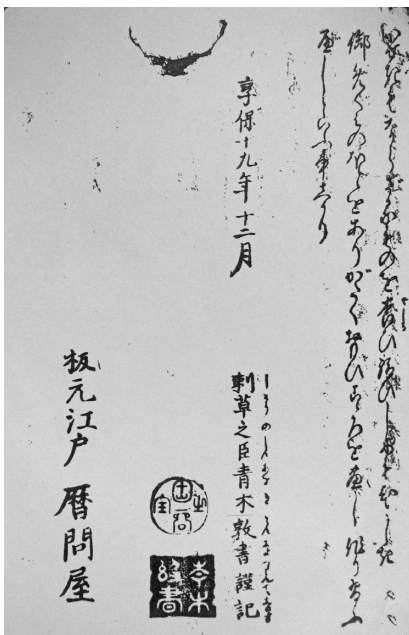
で、今は中村又蔵の地所に、青木文蔵（昆陽）が住んでいるが、非常に孝行者で、また京都の伊藤東涯の下で学び、学問にも大変優れている人物がいる。好感を抱いていた枝直は、上役である越前守に昆陽を官職につけるように上申したのである。越前守は、身分の低い民間人でも、能力ある者は重用する人物だったため、枝直へ「昆陽に心に思うことがあれば、書いて（論文）にして提出する」よう返答したのである。これは、昆陽にとって千載一遇の大チャンスだった。越前守に認められる論文を提出すれば、出世の道が開けることとなる。このときテーマとして選んだのが結果的に薩摩芋であったが、これは「遠島に流された罪人が食物不足のため餓死する惨状を想い、薩摩芋を普及すれば役に立つ」との考えからでもあったとされる。また昆陽は、京都に留学して本草学（植物学）をも学び、西日本ではすでに薩摩芋がひろまっていた、その効用を知っていたため、飢饉に役立つ薩摩芋をテーマに選んだとされる。

しかし、疑問に思うのは、昆陽自身だけで薩摩芋をテーマに選び、タイミングよく（地方御用掛が栽培法の普及書の必要性を特に感じていた）大岡越前守へ、その効用と栽培を記した「蕃薯考」を提出できたのであろうか。表にはでないが、裏では、昆陽の登用を支援した枝直の助言もあったのではないかと推測される。

享保18年に、昆陽は徐光啓の『農政全書』内の原文を写した「蕃薯考」を大岡越前守に提出した。それを讀んだ越前守は、青木文蔵（昆陽）の名と「蕃薯考」の提言書を将軍・吉宗に伝えると共に、漢文であった「蕃薯考」を、余分な箇所を削って仮名混



表紙『薩摩芋功能書并作り様の傳』
(コピー)、御奉行所仰付候板行とある



奥付『薩摩芋功能書并作り様の傳』
(コピー)、享保十九年十二月 青木敦書の謹記とあり、
江戸の曆問屋より刊行された

じり文でやさしく書き改めさせるよう指示した。そして、『薩摩芋功能書并作り様の傳 青木敦書〈あつふみ〉記』として、享保19年12月に奉行所の儀として刊行させ

た。それと同時に、吉宗の意向もあって、功能書の刊行前の享保19年中に、長崎の鐵工で薩摩芋栽培に詳しい平野良右衛門と一緒に、江戸城内の吹上御庭にて、昆陽は、初めて試作経験することとなった。

吹上御庭の試作成功を受け、越前守は刊行と同時に昆陽を12月付けで「薩摩芋御用掛」に命じた。さらに越前守は、早速翌年(享和20年)正月、その功能書を、西國を除き、四国・中国・北国・関東領主へ買い取らせ、農民へ配布するよう指示した。また同時に、吹上御庭にて収穫した種芋1500ケを使い、昆陽に小石川養生所(183坪)・同薬園(150坪)、及び町奉行の与力給地であった下総国千葉郡馬加村と上総国山辺郡不動堂村にて、再度の自力での試作を指示した。馬加村と不動堂村は、海辺で温暖の地であったからだと推測される。なお、その他に、同年2月に功能書と種芋を添えて、伊豆諸島の大島(芋10ケ)、利島(芋5ケ)、新島(芋5ケ)、神津島(芋5ケ)、三宅島(芋5ケ)、御蔵島(芋5ケ)、八丈島(芋10ケ)、小島(芋5ケ)へ配布した。重ねて同年3月、関東地方の各代官(上坂安左衛門・田中休蔵・蓑笠之助)の支配村や、町方の空き地にも種芋少々を配り、植付けさせた。この辺の大岡越前守の様々な指示による動きは、青木七男編『年譜 青木昆陽傳』(2005年発行)に詳しい。

7. 昆陽が後世に名を残した要因

以上の通り、各文献史料類を判読すると、関東地方での薩摩芋試作の取組みについては、將軍吉宗の意向を受けて、地方御用掛で町奉行の大岡越前守が主導したと考えられる。享保期に幕府が進めた薩摩芋試作奨

励の取組みのなかで、昆陽は加藤枝直の推挙により、タイミングよくその流れに乗ることができたのだと思われる。

昆陽より先に、薩摩芋について詳しくまとめた書『番藷録』が、享保2年(1717)に京都の本草学者・松岡恕庵(じょあん：1668～1746年)により作成されている。残念ながら、その番藷録は刊行されなかった。もし、番藷録が刊行されて、広く読まれていたら流れが変わっていたかもしれない。別の人物が関東での試作成功者になっていた可能性もあり得る。

昆陽は、元文元年(1736)11月に薩摩芋御用掛を免じられて薩摩芋より離れ、その後、42歳の元文4年に御書物御用達を拝命し、最後は70歳で書物奉行となった。よって、昆陽が薩摩芋に実際にかかわっていたのは約3年ほどである。つまり、各地域を実際に歩いて、薩摩芋の栽培を普及した訳ではないのである。

では、なぜ昆陽は、後世に薩摩芋の功績者(甘藷先生)として高く名を残すことができたのか。その要因は、次の3点に絞られると推定される。

(その1) 青木昆陽の名による『薩摩芋功能書』が幕府(奉行所)により刊行されて、広く頒布されたことによる。しかし、大坂では頒布されなかったため、約10年後の延享2年(1745)に、必要性を思い大坂の医師・鈴木俊民により『甘藷之記』として重刻された。つまり、救荒作物として薩摩芋の栽培が重要性を増すにつれ、その書が原点となり、同時に昆陽の名も広まったとされる。

(その2) 昆陽を推挙した加藤枝直が、小石川養生所及び薬園等での昆陽の試作状況を詳しく記述した『蕃薯起立』の書付を残したためである。これにより、前年の吹上御庭での試作経験ではなく、享保20年の小石川養生所での昆陽の試作成功が、なにより後世に印象づけられたと考えられる。

(その3) 目黒不動瀧泉寺に昆陽の「甘藷先生」と刻印された墓があったと共に、試作の原点地で、その後、薩摩芋作りが広まった馬加村(現千葉県幕張)に、安政4年(1857)昆陽神社が建立されたことによる。象徴的な神社があることにより、昆陽の名がさらに強まったと考えられる。

8. (結論) 運に恵まれた昆陽

いろいろと昆陽と薩摩芋のかかわりについて考察したが、結論として、昆陽は、次の3つの運に恵まれたのである。

時の運・・享保の改革が進み、飢饉対策として救荒作物である薩摩芋の普及が増していた。特に、各村々での植付けがなかなか進まないことから、幕府(奉行所)は、その栽培法の普及書の必要性を感じていた。

場の運・・昆陽は江戸に住み、関東地方での試作成功が望まれていた。昆陽が京都にいたなら、まったくチャンスのきっかけはなかったろう。

人の運・・加藤枝直が関係する借地に住み、枝直の目にとまらなければ、推挙にはいたらなかっただろう。教養ある枝直との良縁が道を開いたのである。さらに大岡越前守の人材登用と、その展開の速さが運をさらに開いたのである。

<参考資料>

『徳川実紀』(「有徳院殿御実紀附録卷十七」
～甘藷の栽培～)

「砂糖に次ぎては、甘藷をも作らしめ給はむとて、厚く沙汰し給へり、是は享保十七年、西國蝗(いなご)災ありて、農民飢餓せし時、深見新兵衛有隣に、長崎の邊、凶荒の様ども尋ね問はせられしに、新兵衛答へ申しけるには、某が父新右衛門貞恒、長崎に住居けるが、彼地はもと米三千石計り出だす地にして、市中になりはひする者は、五百戸に超えたれば、土地の米をば、十日餘りにして食い盡すべし、諸国運漕の米とだゆる時は、忽ち飢に及ぶべき事なりとて、甘藷を植ゑて、食料とする事を教へけれど、農民の習、手馴れざる業を厭ひ、其頃はさのみ植ゑもせざりしかど、享保六年、彼地に至りて見れば、早や次第に植ゑ増して、食用ともなせり、されば此度の凶荒にも、多くの助となり侍るべし、是より先き、薩州にては、とく之を作り、農民日用の食となし侍れば、彼處に行きか舟人等買ひ求めて、江戸来り、売買ふ事となりしに、何時しか痰(たん)の毒なりといひ出せし者ありて、人々之を嫌ひしかば、再び売る者なくなりけり、されど毒ありといふは僻事にて、却りて補益多く、薩州にては味噌にも作り、又は水にて洒し、葛にも換へ用ひ、濱邊などの五穀を生ぜざる鹵地(ろち)にも多く作り、能く繁茂する物なりとて、培法など書いて奉れり、青木文藏敦書も甘藷考など書いて進らす、其頃長崎の鐵工、平野良右衛門といへる者、江戸に來りしが、彼培法に精しき由、新兵衛より

薦挙せしかば、文藏、良右衛門して、吹上の御庭にて作らし給ひしに、是も年を経て繁殖しければ、夫より近國の代官に仰せて、温暖の地を選び、植ゑさせ給ひしに、幾程もなく、上総下総の邊、之を作るもの多くなりて、江戸にも常に持來りて、之をひさぎ、後には日用の食となりしこと、偏に御仁慈の御心、天意に叶はせ給ひしものなるべし、

(注釈)

- ・有徳院・・・8代将軍徳川吉宗(1684～1751)のおくり名。
- ・享保十七年西國の蝗災・・・1732年の享保の大飢饉。
- ・深見新兵衛有隣(ふかみしんへえありちか:1691～1773)・・・江戸時代中期の幕臣で儒学者。吉宗の側近学者の一人で、寄合儒者から書物奉行になった。
- ・深見新右衛門貞恒・・・深見有隣の父・深見玄岱(1649～1722:ふかみげんたい)は儒学者、漢学者、医家、書家、篆刻家。
- ・痰の毒・・・痰(たん)はネバネバして喉にからみつく粘液。
- ・鹵地(ろち)・・・塩をふくんだ地、不毛の地。
- ・青木文藏敦書(あおきぶんぞうあつのり)・・・青木昆陽(1698～1769)江戸時代中期の儒学者、幕府御家人・書物奉行、蘭学者。享保18年(1733)に大岡越前守忠相に『蕃藷考』を提出。翌年(1734)吉宗へ推挙され、江戸城内の吹上御苑で長崎の平野良右衛門と一緒に薩摩芋を試植し、薩摩芋御用掛となる。